

関一大阪市長と御堂筋

写真は大阪のメインストリート・御堂筋を撮ったものである。これを造ったのが関一(せき・はじめ)大阪市長である。中日新聞 2007 年 3 月 20 日夕刊文化欄に、市長の略歴と業績をコンパクトにまとめられているので引用したい。

「関氏は高等商業学校(現一橋大)を卒業、母校の教授として社会政策・都市計画論を専門とする学者の道を歩んだ。『シティープランニング』という言葉に『都市計画』の和訳を始めて使ったとされる。転機は 1914 年。当時の市長に請われる形で、大阪市の助役になり、大阪の地に足を踏み入れたことが、人生を変えた。23 年、第 7 代の大阪市長に就任した。



市長時代の業績で知られるのが、御堂筋の整備。キタの繁華街・梅田からミナミの難波まで約 4 キロ、幅 45 メートル弱のイチョウ並木が美しい大動脈。26 年に着工、37 年によりやく完成した御堂筋は、地域住民が一部建設費を賄う受益者負担の仕組みも取り入れた。『飛行場でも造るのか』と驚きの声上がるほどセンセーショナルな出来事で、批判も浴びたが、将来の自動車社会の到来を見越したともいえる。市中心部から郊外とを結ぶ地下鉄の建設構想も打ち出し、交通網整備に力を注いだ。

また教育面では、28 年に日本で初の市立大学、大阪商科大学を開校。現在は大阪市立大学へと改編され、優秀な人材を世に送り出している。公害、環境問題解決にも意欲的で、上・下水道の整備や、郊外での労働者向け公共住宅を建設するなど住宅問題の解決にも力を注いだ。35 年 10 月、任期途中で死去したが、市葬として営まれた葬儀には、8 万人の市民が参列したと伝えられている。」

この記事は大阪市立大学に留学して(1981 年から 2 年間)、関一の足跡と業績を丹念に調べた、米国・オレゴン大学のジェフリー・ヘインズさんの研究書の翻訳出版を紹介したものである。翻訳本は宮本憲一監訳『主体としての都市 関一と近代大阪の再構築』、勁草書房、2007 年であり、400 ページを超す大著である。

監訳された宮本憲一先生も記事の中で「都市のアメニティを唱え、住宅政策や大気汚染問題にも取り組み、近代大阪の骨格をつくった。都市問題に興味ある全国の人に参考になる」と指摘する。



(2014 年 12 月 9 日)